

お弁当をめぐる「小宇宙」

びんちゃん

小さな箱に旬のおかずとご飯が詰まった日本のお弁当は、海外のひとたちからあこがれの「小宇宙」として注目されている。

お弁当はときに、残酷な小宇宙にもなる。

昭和世代に育ったわたしの中学校の昼食は、お弁当だった。

看護婦だった母の作るお弁当は前の晩のおかずが多く、茶色いお弁当が定番だった。

中学に入学してすぐわたしは、同級生 A から茶色いお弁当をからかわれた。A のお弁当はいつも、色鮮やかな宝石が詰まった宝石箱のようなお弁当で、A には何も言い返せなかった。それ以降わたしは、毎日母が持たせてくれるお弁当を恥じた。

茶色いお弁当を恥じた自分を、ずっと後になって恥じることになるなんて、そのときのわたしは思いもしなかった。

30 歳を過ぎた頃、わたしは街で A と偶然再会した。A の顔を見たとき、A のカラフルなお弁当が脳裏に蘇って、胸の奥がずきんとした。A にはお弁当の話に触れてほしくなかった。

わたしの思いとうらはらに、A は中学時代のお弁当の話をし始めた。

「また、からかわれる」と、血の気が引くような気持ちになった。

A は意外なことを打ち明けてくれた。A の母親はお弁当を作ってくれないひとだった。A は冷食や果物をフル活用して、弁当箱に詰め込んだという。

「あのときは自分で作っていることがバレないように、必死だった」

A は苦笑いして言った。

「茶色いお弁当が、羨ましかった」

大学の夏休み、毎日一緒にデータ入力のアバイトをした B ちゃんの昼食は、月に数回、重箱入りのお弁当だった。おせち料理のような豪華さに、わたしは目が釘付けになった。

「こんな手の込んだお弁当、見たことないわ。凄いね」

思わず唖ったわたしに、B ちゃんは目を輝かせた。

「うちのおかんが作ってくれてん。でもね」

B ちゃんは声の調子を落とした。

「おかんはメンタルが弱くてよく寝込むからね、気分のいいときだけ張り切って作ってくれるねん。中学のときは、ほとんど自分でお弁当を作ってたわ」

戸惑っているわたしに、B ちゃんは満面の笑みを湛えた。

「おかんのお弁当を褒めてくれて、ありがとう」

社会人になったわたしは貿易会社に就職して、同じフロアの違う会社の女子たちとランチを共にした。

1 年経って、新卒の C さんがランチメンバーに加わった。

整った目鼻立ちの C さんは、ときどき顔に青い痣をつけていたり頬が赤く腫れていたりした。目元が腫れぼったくなっているときもあった。

気になって訊ねると、C さんは戯けながら応えた。

「ドジヤから、しょっちゅうころんで顔をぶつけるねん」
快活に笑う C さんに、わたしもつられて一緒に笑った。
半年ほどして、C さんはランチのとき姿を見せなくなった。
気になったわたしは、C さんと同じ会社の女性に訊ねて啞然とした。
C さんは、急に会社を辞めたという。日頃から振るわれていた父親の暴力が酷くなっ
て、身の危険を感じて家を出たらしい。

C さんの同僚は眉を顰めて、
「彼女が父親に見つからないことを、願っている」

高校を卒業してすぐ就職した C さんは、ランチの場ではいつも明るく、父親からの暴
力を想像できなかった。彼女にとってお弁当の時間は、心安らぐひとときだったかもしれ
ない。父子家庭だった彼女は中学時代、お弁当をどうしていたのか。

中学生の、多感な時期のお弁当は残酷だ。お弁当は、家庭の事情が詰まった小宇宙でも
あるから。当時は気づかなかつたけれど、お弁当を作っていた男子もいたかもしれない。

彼女たちはいま、どんなお弁当を、誰のために、どこで作っているのだろう。

痛みを経験したひとが作るお弁当は、きっと格別な味にちがいない。